

二つの赤いダイスが回転を止め、三と五の目を見せた。

「ヒット」

かすれた低い声が宣言すると、パールピンクのマニキュアを施した指が、プロットの俺の白駒をつまみ上げた。

海は穏やかだ。

六月の日差しは熱く、甲板の温もりに全身が溶けていく気持のよさがある。忘れかけていた初恋の女に出会い、また愛したくなる——海は、そんな懐しさと優しさを俺に与えてくれた。

俺は溜息をついて、吊っている左腕に負担がかからぬよう脚をのばした。デッキシューズはどうに脱ぎ、素足が風に焼けている。

「あなたの番、タカ」

ジャニスがデタンシエ・ブラン・ド・ブランの入ったグラスに指をのばしていった。

日中混血の母親とフランス人の父親の間に生まれた彼女は、ハイブリッドの素晴らしいサンブルだ。十三までパリで育ち、十八までがニューヨーク、二十三歳の今は東京に住んでいる。語学の才能は抜群で、断じて科学薬品の産物ではない栗色の長い髪と淡い同色の瞳の裏側に、父親ゆずりのスパークする頭脳を、百七センチの均整のとれた小麦色の肉体に、母親ゆずりのセクシーな曲線を、あわせ持っているのだ。

ジャニスは俺の溜息を誤解したようだ。手にしたシャンペングラスを、置かれた俺のグラスに軽くあてた。小気味よい音をたてると、微笑して俺の顔をのぞきこむ。

「あなたが好き」

言葉を返しかけた俺の唇に、シャンペングラスをつきつけた。

「でも勝負は別よ。バックギャモンでは、あなたは私の敵じゃないわね」

「どうもそうらしく」

俺はいつて、あお向けにひっくり返った。

空は青くつきぬけている。

海に来て三日目、そろそろだ。俺の中にある回路がもうすぐ切りかわる。

キャビンからずつと流れていた高中正義の軽快なギターサウンドがやんだ。次いで階段に、路が顔をのぞかせた。

「どうします、先輩？ 例の晩飯の約束。シカトする気がないんだったら、そろそろ船をマリ

ーナに戻しますけど」

「何時だ。今」

「二時半です」

俺はジャニスをふりかえった。上半身を起こした彼女の前開きのヨットパーカーから、継ぎ目なく焼けた胸がのぞいている。クルーザーの上ではこの三日間、トップレスを通したのだ。

「オーケイ、ジャニス、君の勝ちだ。シャバに戻るぞ」

「シャバ？」

ジャニスは奇妙な顔をした。彼女の才能も、五年ではスラングにまで到達していない。

「陸さ。帰るんだ」

路は俺の言葉を聞いて姿を消した。すぐにアンカーをひき揚げるウインチが回り出し、エンジンが始動した。

手早く、ジャニスとバックギャモンの道具、グラスの類を片付け、俺はキャビンに向かった。

ステアリングホイールは路が操っている。運転にかけては、車だろうと船だろうと、一級の腕前だ。

「陸に戻ったらお別れ？」

俺の隣にかけたジャニスがつまらなそうにいった。吊っている左肘に、胸のふくらみをそつと押しつけてくる。

俺はニヤついてそれを押し返した。ギプスの上の素肌あたり、ジャニスの乳房の先端がたくなっているのがわかった。

「タカ！」

「怪我人に無理をさせるもんじやないよ」

「無理なんかさせないわ」

両腕を首に回し、俺の目をのぞきこむ。

「来週、シヨ一の仕事がニューヨークであるの。ひと月は帰ってこれないのよ」

「そいつは残念だ」

「うそつき」

「タカさん、ジャニス、アイスティ飲みますか？」

路と並んで立っていた、目のさめるようなブルーのワンピースを着た娘がふりかえった。彼女の名は鮎子、路のパートナーとしてジャニスが連れてきた友達だ。鮎子と路はすっかりうまくいったようだ。俺とジャニスがペースメーカーとして、そつなく任を果たしたからだ。

「ありがとう、もううよ」

俺が返事をする、ジャニスが唇を押しつけてきた。シャンペン匂いに混じって、かすかに潮の香りがした。

ハーバーに船を戻すと、俺たちはあと片付けもそこそこに、マリナー内のコンドミニウムに入った。マリナーの作業員にはたつぷりチップを渡している、船の面倒はきちんとしてくれる筈だ。本当は腕さえ折っていなければ、自分で手入れをしたいところだ。

部屋は最上階の三LDKだ。シャワーを交互に浴び、俺たちは着がえた。

「先輩、だいぶ焼けましたね」

ポロシャツの袖そでに、ギプスをはめた左腕を通そうと悪戦苦闘あくせんくとうしているとところへ路がやってきていった。白いコットンシャツに、こざつぱりとした、淡いブルーのダブルブレザーを着ている。

身長は俺の方が五、六センチは高いが、肩幅かたはばや胸の厚みあつみは同じくらいある。日本拳法にほんけんぽうや空手からてを小さい頃から父親に教えこまれ、鍛えられてきたのだ。その父親は、路が十三のときに、赤坂さかのナイトクラブで撃たれて死んだ。やくざ同士の小競り合いこげりあひだった。その後、路はグレして族に入り、瞬またた間に頭角とうかくを表した。

甘いマスクには不釣り合いな腕うでつぷしと、鼻はな柱ばしちの強さを持っている。四年前、ふとしたことで路と知りあった俺は、血みどろの殴りあいなぐをした拳句あひび、兄貴分あにいになった。

そして路の母親が他のやくざと再婚したのをきっかけに、俺は路をひきとり勉強たべんを叩きこんだ。金とコネをフルに使い、K大の付属高校に入れた。

二十になった今は、K大の二年生だ。顔立ちの甘さに比べ、路がときおりやけに分別臭ぶんべつくさい表情へいしやうを浮かべるのは、おそらくあまり幸せじゃなかった、その頃の記憶のせいだろう。

「畜生ちくしやうっ」

俺は苦心して着たポロシャツの裾すそを、スラックスからひきずりだした。

「忘れてた。今夜の相手は東邦銀行とうぽうぎんぎやうの副頭取だ。晩飯はノータイってわけにはいかないかもしれん。プレスした白いシャツだ」

路にもたせたポロシャツから、左腕をひっこ抜く作業あそびに逆戻りさかへりだ。

「東邦の副頭取、誰だれ、かを、ひっぱって、くるんでしょっ」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。